

祭必齊如也。注古人飲食、每種各出少許、置之豆間之地、以祭先代始爲飲食之人、不忘本也。禁秘抄に、取左波立箸、陪膳取御箸、折出也云々。後醍醐天皇日中行事に、御さばをとりて、あまがつに入れてたてさせ給ふ、陪膳にてをのこ共をめす云々とあり、朝廷へ入りたるうへに、かしこくも神宮へ移りて、豊受宮御饌殿に左波の壺といふ物あり、穢らはしき事は神官人もしらずた、初飯をわかちて、別器に入れて、祖神を祭る事とのみ思へり、

〔三省錄^二食〕食は人の天なりといふて、食なければ一日もたちかたきもの也、故に古人は食するごとに、先ヅ食を少しばかりとり分けて、先代飲食をはじめたる神へ備へ祭りしと謂り、今も僧家には素飯^サのめしとて、先ヅ食を少し取わくる事あり、また片田舎の野人は、今も食せざるさきに飯をいたゞきて食するは、古代の素飯の遺意なり。^{○下}

〔江家次第^{七八}〕相撲召合

三四番間供御膳^略○中 凡毎供可取三把歟、藏人之外不役供之、

〔江家次第^{十七}〕立太子事

書陪膳記

或幼宮時、以女房爲陪膳^上、上一本髮、女藏人四人以上傳供之、藏人一人居土器二口於御盤持參

即受御三把、奉帳中阿末加津云々、

〔侍中群要^三〕取三把事

供^家御飯時、即以銀御箸取三把、入蓋返之、御箸鳴置之云々、故公忠右大辨説也、但近代無此例、

〔禁秘御抄^上〕御膳事

凡御膳、大床子御膳^上、^代古朝夕、^近一度供之、朝餉御膳、^朝夕皆一度供之、此御膳等近代主上不著、又只御膳三度は只女房サバ、カリ取之、只内々稱小供御、御乳母沙汰供第三度所著也、大床子御膳、爾ハ時々必